

義経の静御前を伴った逃避行は、いまや都の人の最大の関心事である。都の人は、頼朝を冷血な合理主義者として嫌う一方、義経と静を哀れと思い、ただただ逃げ延びて欲しいと願うのだった。だが、義経と静の逃避行にはさらなる波乱と悲運が付きまといっている。吉次が、時々郷子のいる家を訪ねてきては、それらの情報を教えてくれた。

「雪の吉野山で静が捕らえられて都に送られてくるそうです」

「静だけですか？」

「義経と静は吉野山で別れたそうです。それより先は修験根本の道場で女人禁制となるので、静を連れて行くことができなかったのです」

「それで静は何故捕まってしまったのですか？」

「義経殿が静に財宝を与えて、三人の雑色をつけて母の磯禪師のもとに帰そうとしたのですが、その雑色たちが財宝を持ち逃げして、静を雪の中に置き去りにしたそうです。それで、静は途方にくれて吉野山を蔵王堂まで降りて来たところで捕まったそうです」

「義経はどこにいったのでしょうか？」

「静が白状した内容によると、義経殿と側近は山伏姿に身をやつして、逃げているということで、北条時政が六波羅勢を出して吉野山一帯を一応探索させたのですが、既に逃げた後でした。ただ側近の佐藤忠信が一人で残って戦ったそうです。恐らく追跡を遅らすためでしょう」

「まあ！忠信さまが・・・」

兄の継信は、屋島の合戦で義経に向かって飛んできた矢の前に飛び出して死んだ。いま弟の忠信は、義経を逃すために一人で吉野山に残り六波羅勢と闘って死んだ。

（弁慶の佐藤兄弟に関する評価は正しかった）と郷子は思う。

「静はどうなるのでしょうか？」

「頼朝の命令で雪がとけたら鎌倉に護送されるのだとか」

「静が何故責められなければならないのでしょうか？」

「さあ頼朝が、日本一の白拍子に会って見たいのではないかな。それに、静は身ごもっているそうだ」

「ええ！静が赤子を・・・」

「静が男を産めば恐らくその赤子は殺される事になるだろう」

「そんなむごいことを・・・」

郷子は、暗澹たる気持ちになった。あの華麗な舞姫が全ての栄

華を打ち捨てて落ちぶれた義経の逃避行に従ったのだ。静は妊婦だったのにもかかわらず嵐の海で遭難し、厳冬の雪山を二ヶ月もさまよった末にただ一人置き去りにされた。郷子は、妊娠初期のつらさを知っているだけに、静の苦難がどれほどのものであったか想像するに難かたくなかった。そのうえ、鎌倉に送られ、もし男の子が産まれれば惨殺されるのだ。法皇に日本一の白拍子という称号を賜った女性のあまりに悲惨な末路だった。それだけに静の義経に対する愛情の深さには圧倒されるばかりだった。

郷子が、日課にしている首途八幡宮での義経の無事安全を祈願し終えて部屋に帰ってくると、吉次が待っていた。

「わたしの弟の堀景光が北条時政に捕まりました。義経殿の命を受けて、京に潜み、義経殿に同情的な公卿藤原範のりすえさまと連絡を取りあって、義経殿一行を興福寺に匿かくってもらっていたようですが、露見してしまいました」

「え！義経は南都（奈良）に潜んでいたのですか」

「山中に居ると見せかけて逆をついたのでしょうか。それと静が捕らえられたと聞いて密かに様子を探りに戻ってきたのでしょうか」

吉次は確信ありげだった。

（それなら、わたしと娘に会いに来てもよかったのに）と郷子は恨みがましく思う

「いずれ奥州に下るにしても、雪が解けないことには動けませんから、それまで興福寺に潜んでいるつもりだったのでしょうか。時政の追っ手が駆けつけた時には、既に逃げた後だったそうです」

（大江広元の計画によれば、一年以上は捕まえずに放浪させて、最後には奥州に追い込むつもりなのだ）

「ところで、数日中に静が鎌倉に護送されるそうです。われわれもその後すぐに出立しますので準備をしておいてください」

「静と同じ道に行くのですか」

「静は東海道を行くようです。われわれは、いつもはもうすこし遅い時期に出発して東山道に行くのですが、この時期ですと東山道はまだ雪が相当残っていますので、鎌倉までは東海道を行きません」

「その後は何？」

「鎌倉街道を経て、東山道武蔵路を行き、東山道の本道に入ります」

義経との婚姻で河越を旅立ち鎌倉へ寄って京の都へ来たのと全く逆の道をたどって奥州平泉に行く事になる。

「静と同じ時期に出立するのは、なにか訳があるのですか」

「それは、民衆の目が静に注目している間に、目立たないように移動すべきと思ったからです。それに、幸い貴あなた女は、義経の正室

という評判の割りには顔がほとんど知られていないから、旅に同行する女性にまぎれていれば正体が明らかになる事はないでしょう」

確かに、郷子が入洛してから、まだ、一年二ヶ月程しか経っていないのだ。その間義経と一緒に外出したのは、八葉車に乗って法皇に面会に行ったただの一度きりだった。

披露宴や酒席に出ていた義経の配下のものは、郷子を知っているようだが、かれらは既にそれぞれの故郷に帰国している。鎌倉から新たに来た北条時政の六波羅勢で、郷子の顔を知っているものは恐らく皆無だろう。

「判りました。ただ出立する前に義母^{はは}にだけには知らせておきたいのですがよろしいでしょうか」

「わたしから連絡して会いに来てもらうようにいたしましょう」

「よろしくお願いいたします」

翌日の午後に玄関をそっと叩く音が聞こえるので志乃が開けると常盤御前が立っていた。常盤は、部屋に入ってくるとすぐに目をさましていた孫娘を抱きかかえた。赤子は泣く事もなく機嫌よく常盤に笑顔を見せている。

「今朝連絡があったから、清水寺に行くといって出てきた帰りの。あまり時間がなくて」

郷子が見ると、常盤はどことなくやつれて見える。

「わざわざ来ていただき有難うございます。ひとこと別れの後挨拶をと思いましたが、わたしの方から一条の家に足を運ぶわけにはいかなかったものですから」

「いいのよ。その方が・・・夫もすこし気にしているから」

(都の同情を集めているとはいえ、宣旨が出ていまや公式には朝敵になった義経に、気の小さい長成は気を揉んでいるのだろう)

「すこしお疲れの御様子ですが」

「そうなの。最近、九郎や貴女や孫のことが心配で良く眠れないの。人の運命は残酷ね。昨日まで世の人々から賞賛される人生の絶頂にあった人が、今日には、没落して石を持って追われることになるのだから。みんなそうだわ。義朝も清盛も九郎も、わたしがかわった人はみんな栄華を極めそして没落したわ。きっとわたしには前世の因縁^{いんねん}で厄病神^{やくびょうかみ}が取り付いているのだと思うわ」

「そんなにご自分を責めなくとも・・・盛者^{じょうしゃ}必衰^{ひつすい}と申しますから、この世の決め事なのかもしれません」

「人生などは、きつとほどほどのところがもつとも幸せなのでしようね。長成はあまり取り得のない平凡な人だけど、本人がいまの生活で幸せだと思っているのだから何の不満もないのよね」

「わたしもそう思うのですが、なぜか自分の意志ではどうにもならない運命のいたずらに巻き込まれてしまって」

郷子は、自分がかつてカルガモの親子になりたかったことを思い出した。

「この孫もかわいそう。生まれたとたんに厳しい運命に巻き込まれてしまって」

常盤は涙ぐんだ。それを見て郷子は、なぜか悲しくなって涙がでそうになったがじっと堪えた。

「そうそう忘れていたわ」

常盤は、赤子を志乃に渡すと、懐から栓のついた四寸ほどの竹筒を取り出した。

「これには、清水寺の霊水が入っているの。九郎と貴女と孫が一緒に幸せに暮らせますようにと祈ってきたから、ぜひ後で飲んで欲しいの」

常盤は、その竹筒を郷子に渡すと、郷子を両腕で抱きしめた。

常盤は泣いている。

「もう会えないかもしれないわね」

常盤らしく率直に言う。

「お義母^おさまもお元気で」

「九郎に会ったら、わたしが無事を祈っていますと伝えてね」

「判りました」

「それでは、もう行かなくては」

常盤は、来た時と同じようにそっと帰っていった。

その夜、郷子は人の気配を感じて突然目を覚ました。暗闇の中に黒い影が潜んでいた。郷子は、傍^{かたわ}らに寝ている赤子を確認した。すやすやと静かに眠っている。郷子は、赤子を背で守るようしながら言った。

「だれ？」

「し！静かに。俺だ」

それは義経の声だった。

「あなたなのですね」

「そうだ。俺だ」

郷子は、信じられないような思いだった。

「いま何処に？」

「それは言えぬ。京には俺を匿ってくれる人が大勢いる。だが、迷惑がかかるといけないのでそれは明かせない」

「何時からいらしたのですか？」

「さっきから、お前と娘の顔をずっと見ていた」

「起こしていただければよかったのに」

「お前が起きなければ黙って消えるつもりでいた」

「そんな他人行儀なことを・・・お会いしとうございました」

郷子は、義経のつれない返事に涙声になった。

「河越の里に帰ったのではなかったのか」

「河越領は、没収され、母に半分返されたのだとか。それに父重頼と兄の小太郎は、蟄居もつきよを命じられているそうでございます。もっともそういう事情がなくても、里に帰る気持ちはありません」

「そういつてもらえるのは有難いが、お前には俺の娘をしっかりと育ててもらいたいのだ。」

「京に潜むのは、六波羅勢が捜していて危ないのではありませんか」

「むかし俺が鞍馬山を降りて、この吉次の屋敷に隠れていた時に真夜中、京の大路小路をうろついていた経験がいま役に立っているよ。あの頃は、平家のかむろが大勢で俺を捜していたが、全く見つからなかった」

「それでは、ずっとここに？」

「いや、雪が融けたら奥州平泉に下るつもりだ」

須美から聞いた大江広元の読みとおりであった。

「わたしも奥州平泉に行くつもりです」

「なぜ？」

「わたしはあなたの正室です。あなたがどのような立場になろうとも、どこに行こうともあなたの傍にいて、あなたを支え添い遂げる覚悟でございます」

それを聞くと義経は、郷子ににじり寄ってしっかりと抱きしめた。郷子は、身体を預けると、義経に負けないくらいに激しく抱きしめた。義経と身も心も一体となったような気がした。感情が高揚して涙が後から後から流れた。平和で安楽に暮らしていた時よりも、もっと幸福な感じがした。

しばらくして、身体を離すと義経は、今度は娘を抱いて頬ほおず刷りをした。

赤子は、まだすやすやと眠っている。義経は、赤子を郷子に返すと立ち上がった。

「それではもう行かなくては。いままであまりにも勝手な事ばかりしてお前の価値に気付かなかった。許してくれ。お前という宝を得て俺も幸せものだ」

郷子は、それを聞いて体が燃えるほどの歓喜に包まれ、息も出来ないくらいだった。

そして、このような悲惨な情況に置かれたからこそ真実の愛が見えてくるのだと思い至った。

「今日お義母かあさまがおいでになりました」

「この家にか？」

「そうです。わたしと孫娘にお別れを言いに来てくださったのですが、あなたにも無事を祈っている事を伝えて欲しいと言われていました」

「そうか。俺も一目お会いしたかったな」

「それで、みんな飲んで欲しいとこのようなものを頂きました」
郷子は、竹筒を義経に見せた。

「これは？」

「清水寺の霊水だそうでございます。義母さまが、あなたとわたしと孫娘と一緒に幸せに暮らせるようにと心を込めて祈っていただいたの思いが溶け込んでいるのだそうです。ですからみんなで飲みましょう」

郷子は、竹筒を義経に渡した。義経は、栓を取ると中の水を口に含んだ。

「うまい水だ。そういえば、遠い昔に飲んだような気がする」

郷子は、竹筒を義経から受け取ると、穴に口をつけた。

(おいしい)

郷子は、その水をすこし手に受けると、傍らに寝ていた赤子の唇にやさしくつけた。

「それでは、奥州平泉で会おう。俺も楽しみが増えて、張り合いがでてきた」

義経は、そういうと忽然と姿を消した。

翌日、須美が訪ねてきた。

「明後日、静御前が鎌倉へ向けて出発します。わたしは、時政殿のご命令で静の監視役として一緒に網代車に乗って行くことになりました。御台所^{みだいどころ}さまと大姫さまの御指示に添えないこととなりますが、御了解ください」

須美は、義理堅い女性だった。

「いいえ、ここまでやっていただき心より感謝しています」

(須美が、都にいれば郷子の所在は常に把握されている。須美が都を離れるのは、郷子にとっては好都合といえる)

郷子は、静の護送部隊の後について、東海道を下る事を須美に話さなかった。

静と須美の乗った網代車が、十人ほどの武士に守られて都を出立した三日後に吉次の一行も旅立った。一行には女性や僧侶などの旅人も加わっているから当初は大部隊である。もっともこういった人々は、目的地でいなくなるから、次第に減っていき、鎌倉に着く頃にはほとんどいなくなってしまう。

郷子は、網代車に赤子連れで乗れば目立つてしまうので車は使

えない。徒歩で旅行するほかない。郷子と志乃は、同じようなつぼ装束を着ることにした。単衣の裾をからげて、その上に^{うちぎ}桂の袖を通しながら、頭から被るようにつぼめてはおる。そのため、顔の両脇が半分ほど隠れるので好都合だ。つぼ装束は^{うちぎ}桂をつぼめる為

に肩に掛け帯を巻くので、その掛け帯に赤子をいれて懐に抱けば楽に赤子を運ぶ事ができ、非常に便利な旅姿だった。さらに念のために市女笠を被り、その笠の周りに腰の辺りまで隠れるような虫のたれ衣と呼ばれる布をつけてたらす。本来はむし除けの布だが、顔と赤子がほとんど隠れてしまうので好都合だ。掛け帯で支えているとはいえ、赤子を抱いての徒歩はかなり大変だった

ので、志乃の申し出もあり、二人で交互に抱く事にした。鎌倉から京に向かう往路は、身内の武士たちに守られ、網代車に乗って移動する楽しい旅だった。それに反して、この復路の旅は肉体的な厳しさもさりながらその精神的なつらさは想像以上のものだった。しかし、つらければつらいほど、義経への思慕は増すばかりだった。それは夫のために^{かんなんしんく}艱難辛苦に耐えているという

自己犠牲の思いが^{とうすいかん}陶醉感をもたらすためかもしれなかった。

静の護送部隊の後を通るという吉次のねらいは、見事に当たった。吉次の一行の泊まる宿場では、静の話で持ちきりだった。

「義経の愛人で、日本一の白拍子という静御前をこの目で実際に見たのよ！ あんなに綺麗な人は今まで見たこともないわ！ あの人が男装で今様を唄い、男舞をまうのを見る事ができるのなら、何処にでも行くわ」

宿の仲居もみな興奮気味で、郷子達にはまったく注意を払わなかった。

静の護衛部隊は人数も少なく、武士はみんな馬に乗っているから静の乗る網代車の速度にあわせて移動しても、徒歩が基準の吉次の一行よりも格段に早い。日が経つに連れて、次第に離され、吉次の一行が鎌倉に着いたときには、半月以上も遅れていた。だがその頃、鎌倉は大変な騒ぎだった。出来上がったばかりの鶴岡八幡宮の^{まいどの}舞殿で、静御前が舞いをまうことになったのだという。初めは頼朝が静御前に舞いを所望したが、静御前はそれを拒否。その後政子が説得してようやく舞うことになったらしい。

その当日、八幡宮の^{だんかずら}段葛には、鎌倉中の老若男女のみならず近隣から聞きつけた人の波で溢れかえっていた。赤子を抱えた郷子も志乃と一緒にそれらの人々の間に^{まぎれ}紛れ込んでいた。八幡宮の舞殿の脇には、五色の幕をめぐるせた^{まじき}棧敷が設けられ、そこには、名のある武将やその妻達が着飾って座っている。棧敷の一部には

御簾が掛けられている。

舞殿を十重二十重に取り囲むおびただしい群集は、静御前が現われるのを今や遅しと待ちかねていた。

赤い毛氈を敷いた舞台の袖から、色白な顔に漆黒の髪を腰までたらしめた静が立烏帽子を被り、薄赤い単衣に白い水干を重ね、紅の長袴を胸高にはいて、錦包藤巻の太刀を腰に穿き、手に蝙蝠の扇を持った男装で現われると、その見事ないでたちに群集は一斉にどよめいた。

その時、御簾が上がって、頼朝と政子と大姫が並んで座っているのが見えた。

頼家と母の姿を捜したが見つからなかった。頼家は、小さいので家に居るのだろう。母に会う事は断念せざるを得なかった。郷子は、彼らを遠望しながら三人と面会した日のことを思い出した。あの日から、まだ一年数ヶ月しか経っていない。

(義理とはいえ、頼朝と政子は、兄と姉だし、大姫は姪に当る。一方、わたしは、群集の中から彼らの弟・義経の赤子を抱きながら、親友となった静が彼らの前で舞うのを見ている)

郷子は運命の過酷さを感じながらやりきれない思いで静のいつもながらの魂の乗り移ったような舞を見ていた。どんな情況に置かれても、静の芸人魂が手抜きを許さないのに相違いない。群集は、初めて見る静御前の幽玄な舞に魅せられたが、それ以上に感動させられたのは、静御前が即興で唄った今様の歌詞の内容だった。

吉野山　みねの白雪　踏み分けて
入りにし人の　跡ぞ恋しき
しずやしず　しずのおだまき　くりかえし
昔を今に　なすよしもがな

郷子は、いまさらながら静の義経を慕う愛情の深さと、それを頼朝の前で披露する勇氣に感嘆せざるを得なかった。静は、単なる美貌の舞姫ではない。愛する人への思いを貫くためには死をも恐れない女の中の女なのだ。群集も同じことを感じたに違いない。舞が終わって、静御前が舞台から消えた後も群集の熱気は冷めるどころかますます熱くなる一方だった。